

# 法 地 南 古 墳

1984

(財) 広島県埋蔵文化財調査センター

## 目 次

( I ) はじめに .....	( 1 )
( II ) 位置と環境 .....	( 2 )
( III ) 調査の概要 .....	( 4 )
( IV ) 出土遺物 .....	( 10 )
( V ) まとめ .....	( 26 )
付・法恩地南第1号古墓 .....	( 29 )

## 例 言

1. 本書は、昭和58年度に調査を実施した農道改良工事に係る法恩地南古墳及び法恩地南第1号古墓(広島県高田郡甲田町所在)の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は甲田町より委託を受けて(財)広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 本書の執筆は、鍛治益生(I, III, IV-a・d, V, 付), 沢元保夫(II, IV-b・c)が分担して行い、鍛治が編集した。
4. 出土遺物の写真は鍛治が撮影した。
5. 出土遺物の整理・実測・図面の製図等は鍛治が中心となって行った。
6. 石室石材の同定は、広島大学理学部地質鉱物学教室柴田喜太郎氏に依頼した。
7. 本書に掲載した第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1(三次, 八重, 乃美, 可部)を使用した。

## 図版目次

図版 1 - a	法恩地南古墳遠景 (南西より)	図版 7 - a	東壁裏込め状態 (東より)
- b	同上, 近景 (北東より)	- b	西壁裏込め状態 (北より)
図版 2 - a	玄室内遺物出土状態全景 (南西より)	図版 8 - a	石室基底石状態 (南西より)
- b	同上, 中央寄り奥壁側 (南西より)	- b	完掘状態 (南西より)
図版 3 - a	玄室内遺物出土状態 奥壁寄り東壁側 (南西より)	図版 9 - a	法恩地南第1号古墓全景 (南西より)
- b	同上, 奥壁寄り西壁側 (南西より)	- b	同上, 完掘全景 (北東より)
図版 4 - a	羨道内遺物出土状態 (南西より)	図版10	法恩地南古墳石室内出土土器 (1)
- b	遺物取上げ後全景 (南西より)	図版11	法恩地南古墳石室内出土土器 (2)
図版 5 - a	奥壁状態 (南西より)	図版12	法恩地南古墳石室内出土土器 (3)
- b	奥壁及び東壁状態 (西より)	図版13	法恩地南古墳石室内出土土器 (4)
図版 6 - a	奥壁及び西壁状態 (東より)	図版14	法恩地南古墳石室内出土土器 (5)
- b	東壁玄門石状態 (北より)	図版15	法恩地南古墳石室内出土土器 (6)
		図版16	法恩地南古墳石室内出土土器 (7)
		図版17	法恩地南古墳石室内出土鉄器 (1)
		図版18	法恩地南古墳石室内出土鉄器 (2)
		図版19	法恩地南古墳石室内出土鉄器 (3)
			出土玉類等

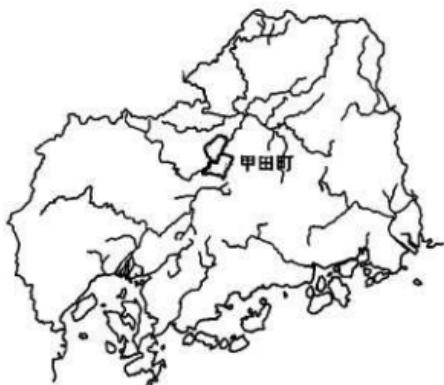
## 挿 図 目 次

第1図	法恩地南古墳周辺遺跡分布図	(1:50,000).....	(2)
第2図	法恩地南古墳周辺地形図	(1:5,000).....	(4)
第3図	法恩地南古墳地形測量図(上), 同遺存図(下)	(1:200).....	(5)
第4図	法恩地南古墳石室実測図	(1:80).....	(折込み)
第5図	法恩地南古墳墳丘土層断面図	(1:80).....	(7)
第6図	法恩地南古墳石室内遺物出土状態実測図(I)	(1:40).....	(8)
第7図	法恩地南古墳石室内遺物出土状態実測図(II)	(1:40).....	(9)
第8図	法恩地南古墳石室内出土土器実測図(I)	(1:3).....	(14)
第9図	法恩地南古墳石室内出土土器実測図(II)	(1:3).....	(15)
第10図	法恩地南古墳石室内出土土器実測図(III)	(1:3).....	(16)
第11図	法恩地南古墳石室内出土土器実測図(IV)	(1:3).....	(17)
第12図	法恩地南古墳石室内出土土器実測図(V)	(1:3).....	(18)
第13図	法恩地南古墳石室内出土土器実測図(VI)	(1:7).....	(19)
第14図	法恩地南古墳石室内出土土器実測図(VII)	(1:4).....	(20)
第15図	法恩地南古墳石室内出土鉄器実測図(I)	(1:6).....	(21)
第16図	法恩地南古墳石室内出土鉄器実測図(II)	(1:2).....	(22)
第17図	法恩地南古墳石室内出土鉄器実測図(III)	(1:2).....	(23)
第18図	法恩地南古墳石室内出土玉類・耳環実測図	(2:3).....	(24)
第19図	法恩地南古墳石室内出土紡錘車実測図	(1:2).....	(25)
第20図	法恩地南第1号古墓実測図	(1:30).....	(29)

## (I) はじめに

高田郡甲田町は昭和57年度に同町大字下小原で法恩地農道整備事業を計画した。この事業は大型農機具の搬入を容易にし農業経営の近代化を図るための農道改良事業で、路線延長220m、幅員4mの計画であった。甲田町は計画地内に周知の遺跡はないが、古墳があるのではないかと考えられたことから広島県教育委員会（以下県教委）に当該地内の文化財等の取扱いについて協議した。これを受けた県教委は現地を踏査し、法恩地南古墳及び法恩地南第1号古墳の存在を確認したため、甲田町にこの旨回答するとともに現状保存が困難な場合は発掘調査が必要であると通知した。これに対し、甲田町は既に工事に着手しており設計変更は不可能であるため発掘調査を希望したが、広島県では昭和58年度から土木工事等に伴う事前の発掘調査は財團法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下センター）が行うこととなつたため、昭和58年1月、甲田町からセンターに昭和58年度の早い時期に発掘調査を実施してほしい旨依頼があった。センターではこれを受けて同年4月から5月にかけて調査を実施した。

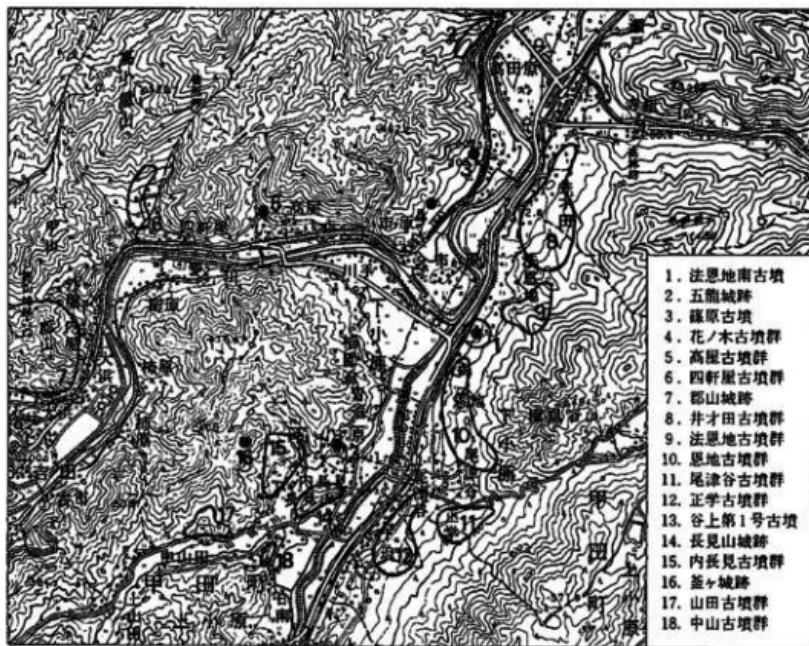
なお、調査及び報告書作成にあたっては、甲田町企画課、甲田町教育委員会、広島県教育委員会をはじめ地元の方々から多大の御協力を得、また広島大学文学部考古学研究室、同理学部地質鉱物学教室柴田喜太郎、広島県立三次高等学校向田裕始の各氏から種々の御指導、御教示をいただいた。末筆ながら関係各位に謝意を表したい。



## (II) 位置と環境

法恩地南古墳、法恩地南第1号古墳は広島県高田郡甲田町下小原字法恩地413-1,3に所在する。甲田町は広島県の中央部に位置し、瀬戸内(広島市)と県北、山陰を結ぶ交通の要衝となつておる。国道54号線が可愛川(江川)に沿って縱貫し、県道三次一向原線に平行して国鉄芸備線が走っている。日本海に注ぐ可愛川は、その支流の戸島川・本村川などを集め町内を南北から北東に流れるが、これらの河川によって侵食、沖積された低地面に聚落が立地し、水稻耕作が行われている。沖積面をとりまく山地部は比較的なだらかで、地質学的にみると白亜紀中期に形成されたとされる高田流紋岩に広くおおわれている。しかし町北部の標高300mのなだらかな地域には甲立礫層と呼ばれる第四紀に堆積した河成礫層が広がっている。これらの山麓緩斜面を利用して、町南部では果樹栽培が行われている。

甲田町内の遺跡について概観すると、現在までに旧石器・縄文両時期に属する遺跡は確認されていない。弥生時代の遺跡には上小原所在の翁ヶ平遺跡があり、中期中葉頃の時期と考えら



第1図 法恩地南古墳周辺遺跡分布図 (1:50,000)

れている。この遺跡は周辺耕地より比高差約100mを測る高所にあり、また岩座状の場所から遺物が出土したことなどから祭祀に関連する遺跡と考えられる。

古墳時代になると、古墳を中心に遺跡数は急増する。現在知られている古墳の分布状況を観ると、可愛川流域を中心として支流の戸島川流域に多くの古墳が分布する。とくに可愛川及び戸島川右岸の毛宗坊山より権現谷山にかけての西麓派生丘陵上に数多く分布しており、その特徴として丘陵傾斜変換点付近の比高差20~30mを測る丘陵上に立地する。これに対し左岸部では、単独に営まれるものが多くわずかに戸島川左岸に小規模な古墳群を形成するにすぎない。

町内の古墳の多くは知られる限り横穴式石室を内部主体とする円墳が主流をなすが、箱式石棺を内部主体とするものも一部有り、内長見第1~3号古墳が知られている。また井才田古墳群中の第22号古墳は前方後円墳として知られているほか、同古墳群が立地する丘陵上には本地域では稀な横穴が存在する。なお現在までのところ町内での古墳の発掘調査例は僅少なため、個々の古墳の実態は不明確な点が多くある。

昭和57年度調査が行われた谷上第1号古墳は法恩寺南古墳の南西約2km、字青迫に所在する横穴式石室を内部主体とする古墳で、調査時にはすでに石室の大半を失い、奥壁と側壁の一部を残すのみであった。流出土中より須恵器50点、土師器1点が出土したが、これらの遺物を石室床面に敷きつめ土器床としていたと推定している。このような在り方は法恩寺南古墳の在り方と同一である。

また明治年間に遺物出土の荒神古墳は、法恩寺南古墳の南西約900mに位置する円墳で、横穴式石室を主体としている。石室内からは金銅製太刀1、鐵刀3、金環4等が出土している。

古代の遺跡については現在のところ明らかではない。倭名抄によると高田郡には7郷あり、この中に麻原(おばら)郷がある。この麻原郷は現在の上小原、下小原の地に比定されている。なお7郷の中には高田郷の名はないが、町役場の一帯は高田原の名があり、郡名の高田を冠しており、高田郷の遺名でもと都家のあった地ではないかと推定されている。

中世の遺跡には大字上甲立の五龍城跡(城主宍戸氏)、大字下小原の釜ヶ城跡(城主三上氏)、清源城跡(城主門田氏)、長見山城跡(城主渡辺氏)などの城跡、また古墓には大字上甲立の各所に宍戸氏の墓があり、長見山城跡の付近には渡辺氏の墓が伝えられている。このほか大字上小原の山田積石塚からは備前焼の骨蔵器、土師質土器の皿、古錢が出土している。

#### 参考文献

- 甲田町教育委員会 「甲田町史」 昭和42(1967)年
- 高田郡史編纂委員会 「高田郡史」(上巻) 昭和47(1972)年
- 広島県教育委員会 「谷上第1号古墳緊急発掘調査概報」 昭和58(1983)年
- 広島県教育委員会 「山田積石塚発掘調査報告」 昭和47(1972)年
- 広島県 「広島県史」・地誌編 昭和52(1977)年

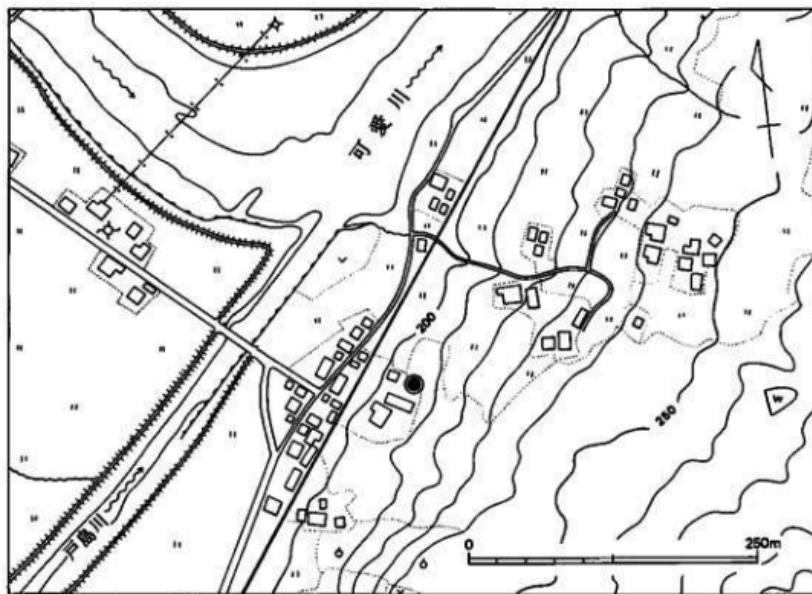
### (III) 調査の概要

#### (1) 現状と経過

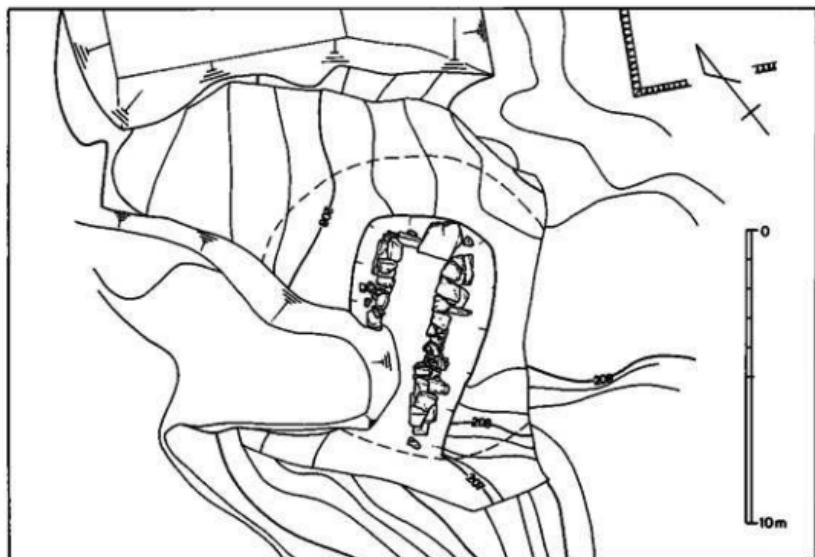
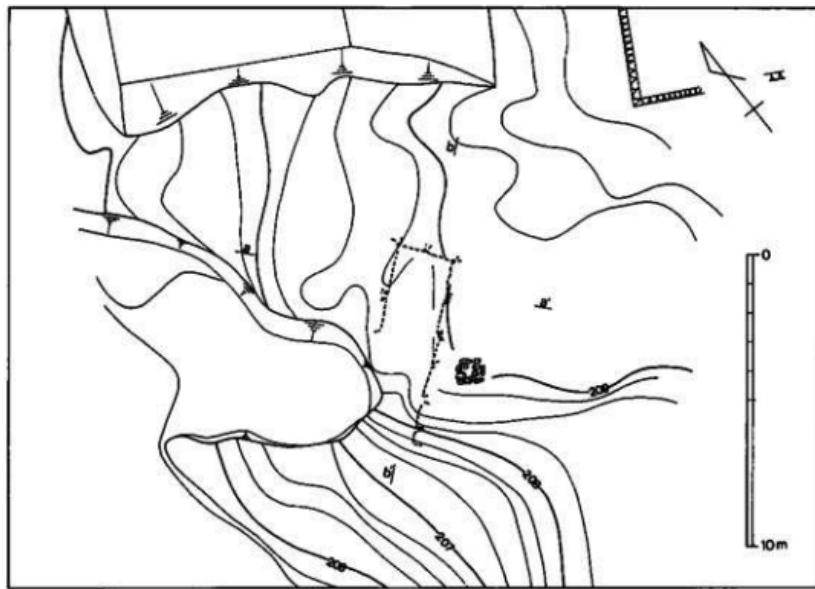
本古墳の位置する丘陵周辺は、水田等の開削が著しく旧地形を留めていない。本古墳も現状では竹等が生育する緩斜面となっており、外見上墳丘は明らかではない。天井石はすでに失われており、奥壁及び側壁の一部がL字状に露出していた。また墳丘の西側部分は土取りのため大きく掘削を受けており、断面に縦長の石柱状の石材及び側壁の一部が露出し、周辺にも石材が散乱していた。調査はL字状に露出する奥壁側の西端部を中心に側壁に平行する基線を設定し、側壁の中央とこの基線が直交するラインを設定し、墳丘を4分割する方法で行った。

掘下げは主体部より実施したが、その結果玄門を有する横穴式石室で、床面は土器床となっていることが明らかとなつたほか、遺物の出土状況及び遺物の検討の結果埋葬は5回程度行われたことが明らかとなつた。また墳丘については旧地表面に地山土等を盛土した直径約10mの円墳で、外部施設等は有さないことが明らかとなつた。

一方、墳丘南東部に存在した古墓には宝篋印塔、五輪塔の一部があつたが、移築されたものと思われ自然石を墓標石とし、埋葬施設をもたないものであった。



第2図 法恩寺南古墳周辺地形図 (1:5,000)



第3圖 法思地南古墳地形測量圖(上) 同遺存圖(下) (1:200)

## (2) 内部主体

本古墳の内部主体は、玄室と狭道部を玄門状の石柱を立てることによって区分する横穴式石室で、その主軸方向はN51°Eで南北方向に開口する。石室の全長は約7.1mを測り、そのうち玄室部4.1m、狭道部3mを測る。玄室幅は奥壁側で1.9m、中央付近で1.85m、玄門付近で1.8mを測り、やや奥壁側にかけて広がる長方形を呈する。狭道部は、土取りにより西壁を損失しているため規模は明確にしがたいが、玄門付近で幅約1.1mと推定される。

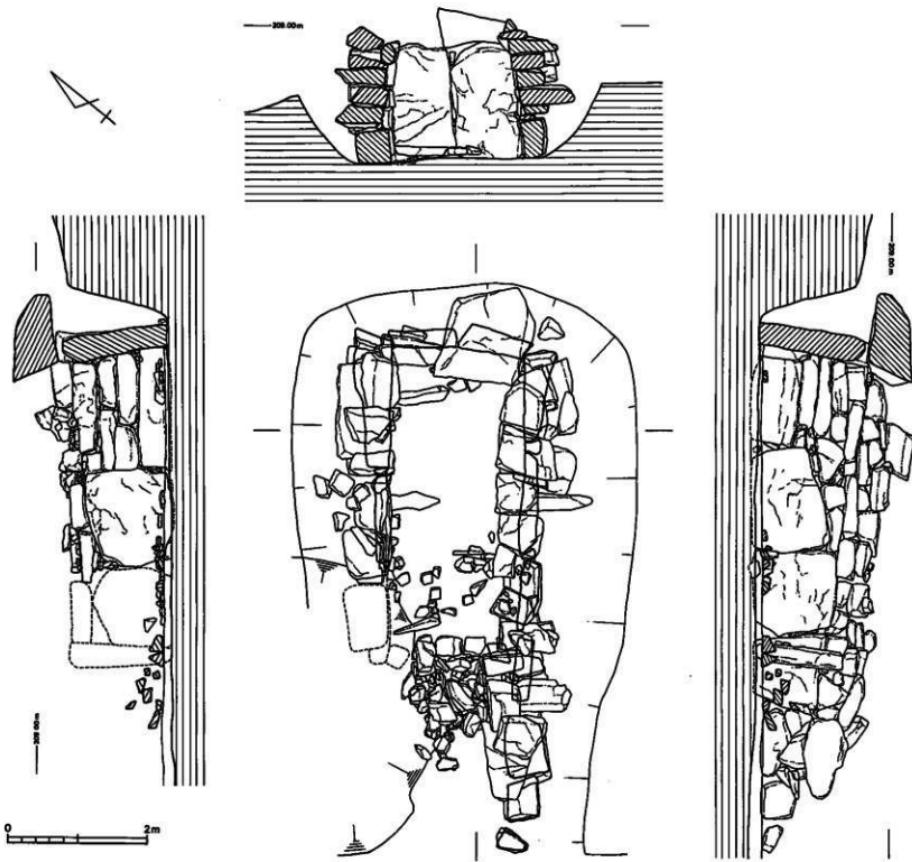
奥壁は高さ約1.6m、幅0.9~1mの長方形の扁平な板石を石室床面より5~6cm掘下げて据えており、約82°の角度で内傾している。東奥壁石直上には、これと面を整えた角礫を横口積みしている。両側面は高さ40~60cm、幅50~60cmの側壁第1基底石で挟込むような状態で固定しており、西壁側は直角にまた東壁側では鈍角に接している。

側壁は両側壁とも第1基底石を石室床面に直接据えただけの長手積みを行い、2枚目以下は玄室内においては幅広の石材を石室床面を若干掘下げ広口積みし、狭道付近では横口積みする。ただ玄室の2段目以上については東壁と西壁とでは石材用法が異っている。西壁においては、第2基底石上面レベルに合わせるよう3段にわたって石材を長手積みするのに対し、東壁では、第2基底石上面レベルより第3基底石上面レベルが高く、また第2基底石上面が斜めに傾斜しているため、これに合わせるような石材を長手積みまたは横口積みしており、西壁に対し不揃いの感を与える。東壁ではさらに玄門石上面レベルと一致するよう石材を長手積みした後、上段側壁を横口積みして構築する。これらのことから石室構築にあたっては、基底石及び玄門石の石材の高さに規制を受けながら数回に分け石室を構築した状況が窺える。また、東壁西壁の裏面については西壁側裏面は比較的整っているのに対し、東壁裏面は不揃いであり、これは西壁を先に構築した後東壁を石室掘方の規制を受けて構築したためと思われる。

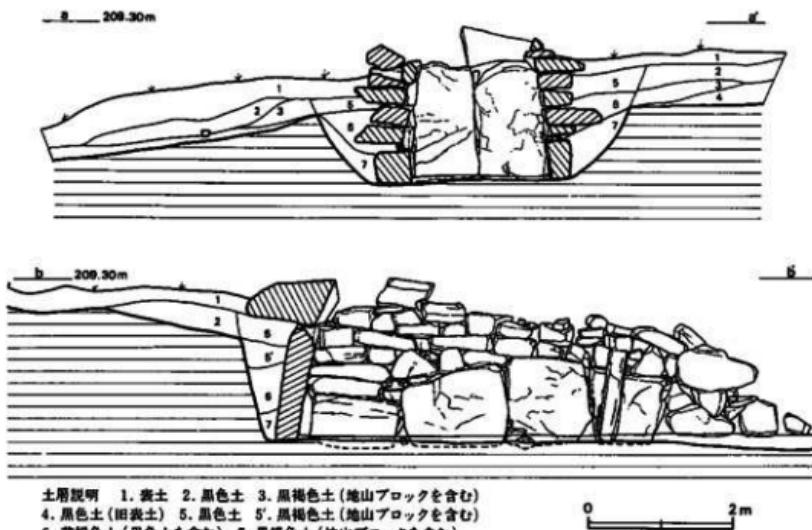
両側壁の傾斜角度は西壁ではほぼ垂直に立上るので対し、東壁側では基底石より上段はやや持送り気味に立上り最上段の石と基底石とではかなりの差を見せる。このことは上述のような用石法の差違及び構築順位の差違によるものと考えられる。

一方狭道部については前述のように石室床面をわずかに掘下げて横口積みして側壁を構築するが、石材自体不揃いで間際に小角礫で充填する方法を用いている。また玄室からの壁面の取り方は玄門石付近よりやや内側に入るもののほぼ直線的で、所謂両袖式の範囲に入るものとは言いたい。

石室底面は第1次据方面がやや凹凸を成していたため、地山土で被覆しほぼ水平に整地している。この床面上を後述するように須恵器杯蓋・身・大型腹形土器破片等で被覆し、土器床としているほか、棺台と考えられる細長の石材が据えられている。棺台の位置は奥壁より0.6m付近、2.1m付近、3.8m付近のともに西壁寄りにあり、奥壁側のものと玄門付近のものは断面三角形を呈すのに対し、中央のものは上面平坦な石材が使用されている。奥壁側のものと中央の



第4図 法恩寺山古墳石室実測図 (1:80)



第5図 法恩寺南古墳墳丘土層断面図 (1:80)

ものは石室床面に密着しており、上面レベルは奥壁側のものが約8cm高くなっているが、玄門付近のものはやや床面より浮いており、中央の棺台レベルより約20cm高い位置にある。

一方東壁寄りの奥壁より2.8m付近で3個の角礫を間仕切り状に立てているが、これに対応する石材がないため棺台とすべきかは検討の余地を残す。

またこれらとは別に玄室中央の棺台より玄門付近にかけて上面平坦な石材を床面に密着して10数個検出したが、敷石とは言えるほどではない。

奥壁より狭道側へ約4m、玄門石とはほぼ同位置より狭道入口側1.9m、高さ約1mの範囲で封鎖石を検出した。使用された石材は人頭大より拳大までの角礫で比較的乱軸に積まれているが玄室と接する位置ではほぼ玄門幅いっぱいになる3個の角礫を玄室側に面を整え、床面に密着させて据えていた。

石室掘方は北東側背面カット部より南西側約1.9m、北西墳端部より南東側約3m付近の黒色盛土層から掘込まれており、現存上場幅4.6m、現存上場長8m、現存高1.8mを測り、また下場幅2.7m、下場長7.5mを測る。掘方底面はやや凸凹があるが石室床面形成時に地山土で整地している。掘方底面より側壁への立上りは、横断面方向で緩やかなカーブをなし、縦断面方向の奥壁裏側では約75°の角度で立上っている。石室と掘方との空間の裏込めには、黒色土及び地山ブロックを含んだ黒色土を互層にして充填しており、石等は使用していない。但し、基底石については安定させるためわずかな掘方を掘り、小角礫で倒崩を防止している。

### (3) 遺物の出土状態

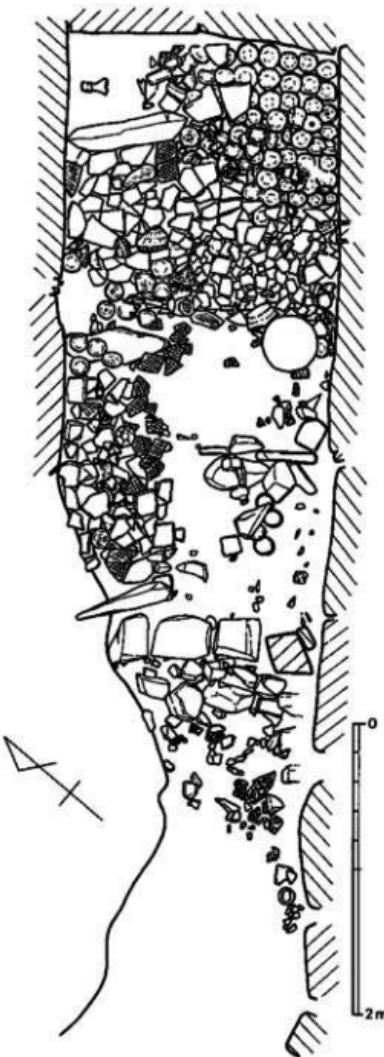
本古墳の玄室床面は所謂土器床と言べき施設を有するもので、その出土状態には特色を有す。

まず全体的な集散の状況を観察すると玄室内中央部より奥壁側にかけては奥壁寄り棺台から奥壁にかけての空間を除いて隙間なく比較的整然と、床面にはば密着した状態で須恵器を敷きつめている。但し奥壁寄り棺台より奥壁にかけての空間には直刀、鐵鎌等の鉄製品が集中しており、この部分に土器床が及ばなかった理由はこのような鉄製品の在方によると思われる。

一方玄室中央より玄門付近にかけては中軸ラインより西壁にかけて土器が集積するのに対し、東壁にかけては他の部分と様相が異なり部分的には土器の集積が認められるものの、かなりの空間が空いており、土器床はこの部分にまでは及ばない。

土器床についてさらに細かく検討すると奥壁寄りの東壁側 $1 \times 1.1\text{m}$ の範囲では杯身・蓋・高杯杯部をほとんど伏せた状態で50個体近く検出した。その配置には原則として重なり合わないよう置かれているが、部分的には2段に重なる部分もある。これらの杯類には新旧のものがあり、これらが混然と存在する。

一方奥壁寄り棺台より玄室中央の棺台にかけての範囲では大型變形土器、横瓶等の破片を全面に敷きつめた状態



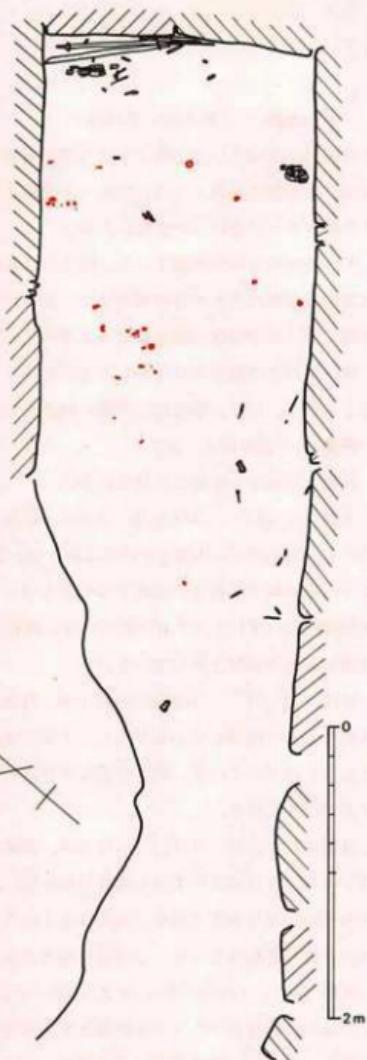
第6図 法恩寺地南古墳石室内遺物出土状態実測図(Ⅰ)  
(1:40)

であった。このうち中軸線より東壁側は比較的細かな破片でかなりのものが重なり合うのに対し、西壁側では大型の破片が多く、重なり合うものが比較的少ない。また西壁側の破片が大型彫形土器のものが主であるのに対し、東壁側では多器種の破片が認められた。なお復元作業の結果、この付近で出土した遺物のうち、大型彫形土器を除く遺物についてはほぼ完形品となるが、大型彫形土器については底部の破片のみを欠損することが明らかとなった。

一方玄室中央の棺台より玄門にかけての西壁寄り出土の遺物は、奥壁寄りの出土状況と異なり、彫形土器破片や杯身等と小角礫とが混在しており、また床面よりわずかではあるが浮く傾向を示す。杯類等では奥壁寄りのものより若干新しい要素を示すものが存在する。

これに対し東壁側の遺物のうち杯類は西壁寄りのものと同時期のものである。また狭道部出土のものは細片化したものが多く、一部玄室内的遺物に接合できるものがあるほか、杯類では最も新しい時期のものが存在する。

一方鉄製品・玉類は奥壁寄り棺台から奥壁にかけて直刀・鉄鎌等の鉄製品が集中し、また玄室中央の棺台付近に玉類が集中するほかは比較的散乱する状況で、出土するレベルにはばらつきがあり、一部土器床直下より出土するものもある。



第7図 法恩寺南古墳石室内遺物出土状態実測図(II)  
(1:40)(黒: 鉄器、赤: 玉類)

## (IV) 出 土 遺 物

### a. 土器 (第8図～第14図)

本古墳より出土した土器はすべて須恵器類で、数度の追葬が行なわれて副葬されており、总数103点を数えるが、これらのセット関係及び一度に副葬された数量については明確ではなくその数はさらに多かったと思われる。

すべての須恵器を概観すると、胎土には石英粒・長石粒・細石粒などの骨材を混入しており大型品ほどそれぞれの骨材量が多く、また粒も大きな傾向がみられる。色調はいずれも灰色を基調とし、焼成温度の関係によって淡灰色～灰白色・暗黄灰色を呈している。その中には一部に緑～黄緑色の自然釉が付着したものがみられ、燃料としてアカマツ類が用いられた可能性が考えられる。以下、器種別に形態・特徴を列記する。

#### 杯蓋 (第8図1～30)

形態より大きく4類に分類される。

I類 (1～12) 口径14.3～15.2cm、器高3.9～5cmを測り、本古墳で最も法量が大きなものである。天井部から体部にかけてはゆるやかな丸みをもち、口縁部の形態は体部を下方におりて、その境界にあまい稜線をつくるもの (1～7) と、そうでないもの (8～12) とがある。また端部はいずれも丸くおさめている。調整手法についてみると、天井部は丁寧にヘラ削りを、他はミズヒキ調整を施している。

II類 (13～21) 口径12.9～13.8cm、器高3.9～4.7cmを測る。天井部は平坦気味で体部との境界にあまい稜線をつくるものと、I類の法量を若干小さくしたものがある。口縁端部はいずれも丸くおさめている。調整手法は天井部がヘラ削り、他はミズヒキ調整を施し、内面に仕上げナデがみられる。

III類 (22～29) 口径11.7～12.3cm、器高3.2～4.4cmを測り、本古墳で最も法量が小さいものである。天井部はいずれもほぼ平坦を呈し、体部との境界にあまい稜線をつくる。口縁部は若干下方におりており、端部は丸くおさめている。調整手法は天井部がヘラ削り、他はミズヒキ調整を施している。なお26～29は玄室入口付近より一括して出土した。

IV類 (30) 口径12.3cm、かえり径9.3cm、器高2.4cmを測る。天井部は平坦状を呈し、体部との境界に稜線をつくり、口縁部は若干外湾気味に体部からのびる。また口縁部内面にはかえりを有している。調整手法は天井部がヘラ削り、他はミズヒキ調整を施している。

#### 杯身 (第9図31～60)

杯蓋同様に形態より大きく4類に分類される。

I類 (31～42) 口径11.9～14.9cm、受部径14.7～15.8cm、器高3.8～4.5cmを測り、本古墳で最も法量が大きなものである。底部は丸みをもち、受部は内湾気味に外上方にのびる。立上

りは外反気味に内傾し、端部は丸くおさめている。調整手法は底部がヘラ削り、他はミズヒキ調整を施している。立上りはオリコミ手法による。

II類（43～52） 口径11.1～12cm、受部径13.4～14.6cm、器高3.8～4.4cmを測る。底部は平坦気味で、受部は外湾気味に外上方にのびる。立上りは内傾し、端部は丸くおさめている。調整手法は底部がヘラ削り、他はミズヒキ調整を施し、内面に仕上げナデがみられる。なお、立上りはオリコミ手法による。

III類（53～59） 口径10.4～11cm、受部径12.3～13.4cm、器高2.9～3.9cmを測り、本古墳で最も法量が小さいものである。底部はいずれも平坦を呈し、受部は内湾気味に外上方にのびる。立上りは外湾気味に内傾し端部は丸くおさめる。調整手法についてみると、底部はヘラ削り、他はミズヒキ調整を施す。立上りはオリコミ手法による。なお56～59は玄室入口付近より一括して出土した。

IV類（60） 口径13.8cm、器高4.1cmを測る。底部は平坦を呈し、体部との境に稜線を有し、外反しつ上方にのびる。口縁部は若干外湾し、端部は丸くおさめる。調整手法は底部はヘラ削り、他はミズヒキ調整を施している。

#### 有蓋高杯・蓋（第10図61・62）

口径14.3cm、器高4.7、5.3cmを測る。天井部は丸みをもち、口縁部は内湾気味に垂下する。体部と口縁部の境界付近に1条の沈線をめぐらせ、61は口縁部に烈点文を施す。天井部は算玉状のつまみを付す。調整手法は天井部はヘラ削りのち丁寧なナデを、他はミズヒキ調整を施す。

#### 有蓋高杯・高杯（第10図63・64）

口径12.3cm、受部径15.2cm、脚径15.2、16.2cm、器高18.9、19.2cmを測る。杯底部は丸みをもち、受部は内湾気味に外上方にのびる。立上りは外湾気味に内傾し、端部は丸くおさめる。脚柱部は長方形2段透しを3方に穿ち、中央に2条、透し下方に1条の沈線をめぐる。端部は若干肥厚する。調整手法はミズヒキによる。なお杯部と脚部はハリツケ手法による。

#### 無蓋高杯（第10図65～68）

I類（65・66） 口径12.6、14.3cm、脚径10.4、12.3cm、器高13.7、14.3cmを測る。杯底部は丸みをもち、椀状を呈し、脚部はラッパ状に開く。脚中央部に2条の沈線をめぐらす。杯部は1条の沈線を有するもの（65）と、段を有するもの（66）がみられる。調整手法は66が杯底部にカキ目を施し、他はミズヒキによる。

II類（68） 口径11.9cm、脚径11.1cm、器高15.5cmを測る。杯底部は丸みをもち、口縁部は外反気味にのびる。端部は丸くおさめ、体部には段を有する。脚部はラッパ状に開き、上段刻み：下段三角形の透しを3方に穿ち、中央部に2条、透し下方に1条の沈線をめぐらせる。脚端部は肥厚する。調整手法はミズヒキによる。

III類（67） 口径12.2cm、脚径12.6cm、器高9.8cmを測る。杯底部は丸みをもち、口縁部は外湾気味にのびる。端部は丸くおさめる。脚部は短かくラッパ状に開き、長方形透しを3方に穿

つ。調整手法は杯底部はヘラ削り、他はミズヒキによる。

**壺** (第10図69)

口径10.5cm、器高3.5cmを測る。天井部は丸みをもち、口縁部は内湾気味に垂下する。端部は外反し、浅い沈線をもつ。調整手法は天井部はヘラ削り、他はミズヒキによる。

**壺** (第10図70・71)

I類(70) 口径8.9cm、器高11.7cmを測る。口縁部は垂直に立ち、肩部と体部の境界付近に1条の沈線をめぐらす。底部は丸みをもつ。調整手法は底部は丁寧なヘラ削りを、他はミズヒキによる。

II類(71) 口径6.2cm、器高6.2cmを測る。口縁部は強く外湾し、肩部と体部との境界付近にゆるい稜線をもつ。底部は平坦を呈す。調整手法は底部はヘラ削り、他はミズヒキによる。

**壺** (第10図72)

口径10.8cm、器高7.2cmを測る。底部は器壁が厚く丸みをもち、口縁部は垂直気味に立上る。端部は丸い。調整手法は底部はヘラ削り、他はミズヒキによる。

**長頸壺** (第11図73)

口径8.7cm、器高16.5cmを測る。口頭部は外反し、肩部と体部の境界に稜線をもつ。底部は丸みをもつ。調整手法は底部ヘラ削り、他はミズヒキによる。

**壺** (第11図74~77)

I類(74) 口径13.5cm、器高17cmを測る。口頭部はラッパ状に開き、境界に強い段をもち、端部は丸くおさめる。体部は無花果状に張り、底部は平坦気味を呈す。頭部には2条の沈線をめぐらし上に波状文、体部には中央部に孔を穿ち上下に1条の沈線、2段の烈点文を施す。調整手法は頭部・体部にカキ目を、他はミズヒキによる。

II類(76) 口径13.1cm、器高17.6cmを測る。口頭部はラッパ状に開き、境界には強い段をもち、端部は若干肥厚し平坦を呈する。体部は球体状に張り、底部は丸底である。中央部に孔を穿ち、2条の沈線をめぐらす。調整手法はミズヒキによる。

III類(75・77) 口径12.5、12.9cm、器高15.8、17.6cmを測る。口頭部は漏斗状に開き、境界に段をもつ。体部は無花果状に張り、底部は平坦(75)、尖り気味(77)を呈する。沈線は頭部と体部に1条(75)、2条(77)めぐらせる。調整手法は底部はヘラ削り、他はミズヒキによる。

**平瓶** (第11・12図78~81)

I類(78) 器高11.4cmを測る。頭部は外反し、体部は梢円状に張る。底部は丸底を呈する。また肩部には鍵形の突起をもつ。調整手法は体部にカキ目、他はミズヒキによる。体部の円盤状封鎖痕は底部にみられる。

II類(81) 器高14.7cmを測る。頭部は外反し、外上方にのび、体部は俵状に張る。底部は丸底を呈す。肩部にはボタン状突起をもち、肩部・底部に沈線+烈点文の文様帯を施す。

調整手法は体部にカキ目、他はミズヒキによる。なお体部の円盤状封鎖痕は底部にみられる。

Ⅲ類 (79) 口径6.8cm、器高17.6cmを測る。口頸部は外反し上方にのびる。端部は丸くおさめる。体部は隅丸方形状に張り、底部は平坦気味を呈する。調整手法は体部下半がカキ目、他はミズヒキによる。体部の円盤状封鎖痕は底部にみられる。

Ⅳ類 (80) 口径6cm、器高14cmを測る。口頸部は外反し、外上方にのび、端部は丸くおさめる。体部は梢円状に張り、底部は尖底状の平底を呈する。調整手法は底部はヘラ削り、他はミズヒキによる。なお体部の円盤状封鎖痕は上部にみられる。

#### 短頸壺・蓋 (第12図82)

口径16.2cm、器高6.3cmを測る。天井部は平坦気味で、口縁部は外反し下方にのびる。内面にはかえり状の隆帯をもち、端部は丸くおさめる。調整手法は天井部はヘラ削り、他はミズヒキによる。

#### 短頸壺 (第12図83)

口径10.7cm、器高23.3cmを測る。口頸部は直立し、内面に隆帯をもつ。体部は無花果状に張り、底部は平坦気味を呈す。肩部には橢形の突起を3ヶ所有する。調整手法は体部上半はカキ目、下半は斜方向のタタキの上にカキ目を施し、内面は同心円タタキがみられる。他はミズヒキによる。

#### 横瓶 (第13図84)

口径11.4cm、器高27.2cmを測る。口頸部は外湾し、端部は肥厚し丸くおさめている。体部は俵状に張る。調整手法は外面は格子目タタキの上をカキ目、内面は同心円タタキを施す。他はミズヒキによる。

#### 提瓶 (第13図85)

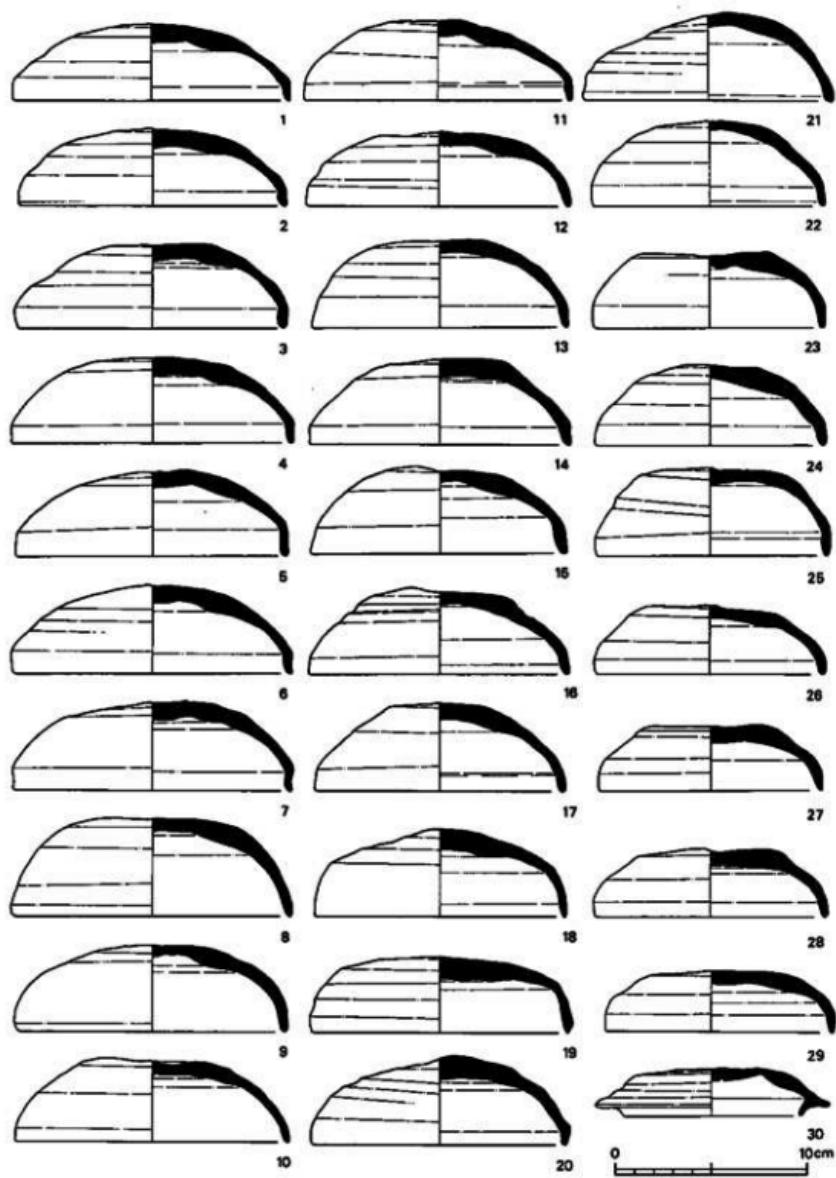
口径12.2cm、器高38.8cmを測る。口頸部は外湾し、端部は肥厚し丸くおさめている。体部は正円状に張り、側面観は梢円形を呈する。肩部は耳形の突起をもつ。調整手法はミズヒキによる。

#### 大型甕 (第13図86)

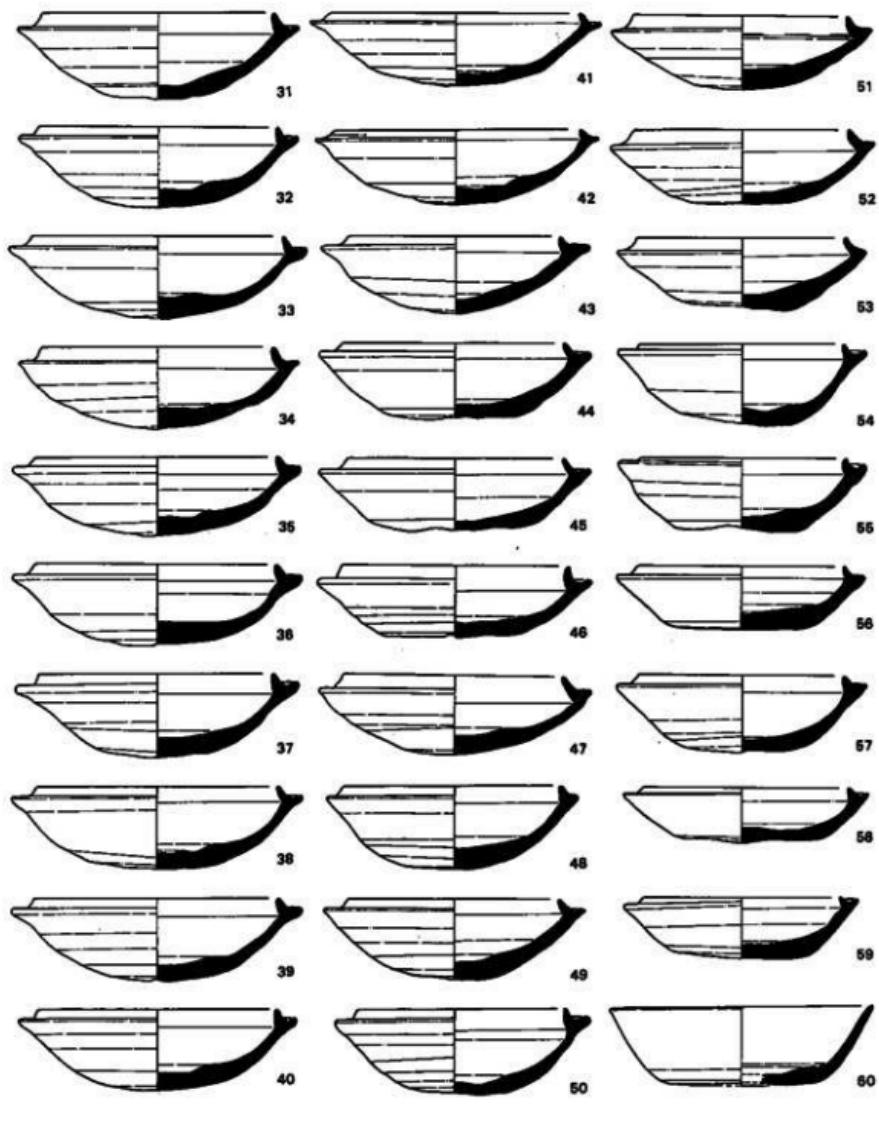
口径66cm、器高74.4cmを測る。口頸部は漏斗状に開き、端部は平坦を呈する。体部は梢円状に張る。口頸部には櫛齒状工具による「ハ」字状の連続文を、下方に刻み+沈線の文様帶を施す。調整手法は外面は格子目のタタキの上をカキ目、内面は同心円タタキを施し、他はミズヒキによる。

#### 中型甕 (第14図87・88)

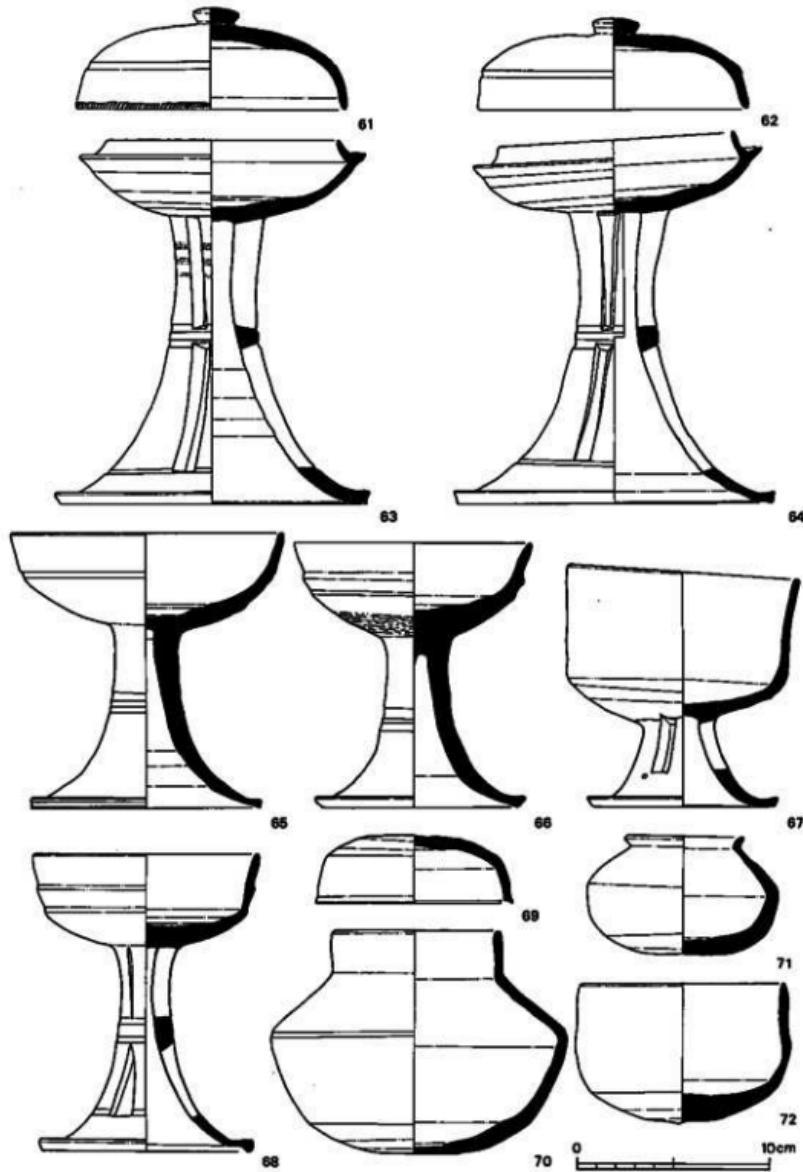
口径22.4・21cm、器高48.4・43cmを測る。口頸部は外湾し、端部は肥厚するもの(87)と丸くおさめるのみのもの(88)がある。体部は倒卵形状を呈し、底部は丸い。調整手法は外面は平行タタキの上をカキ目、内面は同心円タタキを施す。他はミズヒキによる。



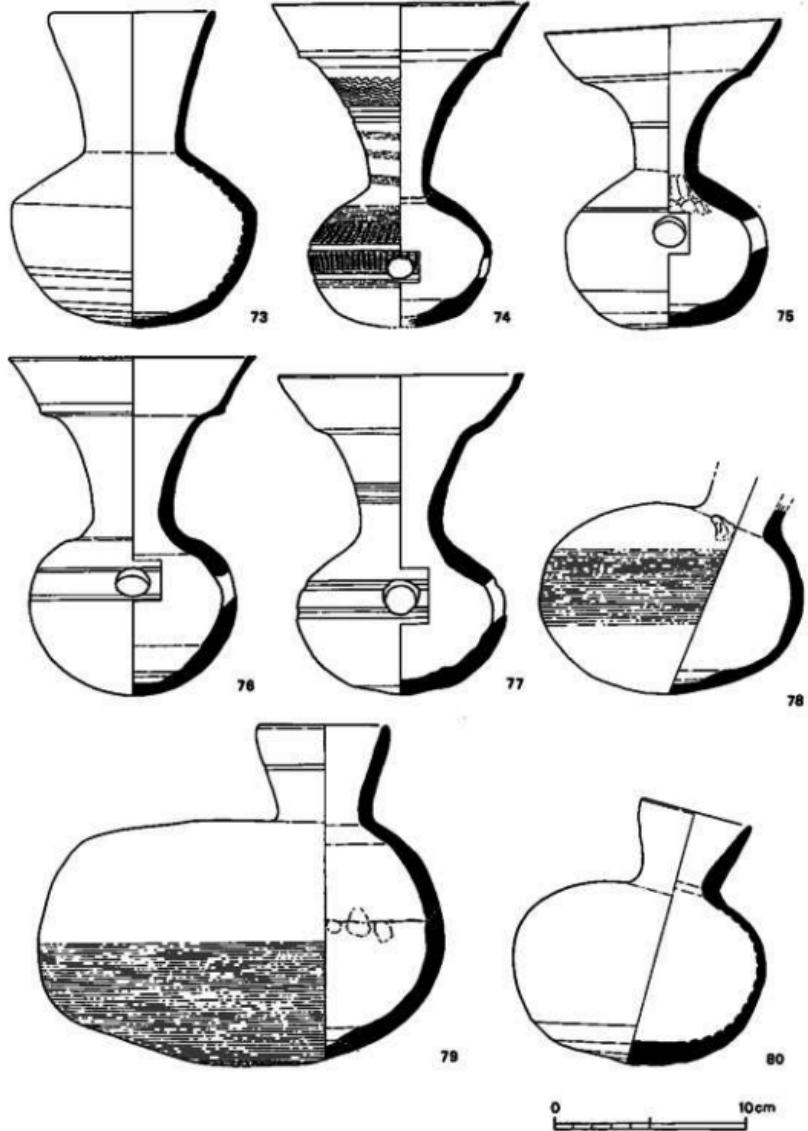
第8圖 法恩地南古墳石室內出土土器実測図(Ⅰ)(1:3)



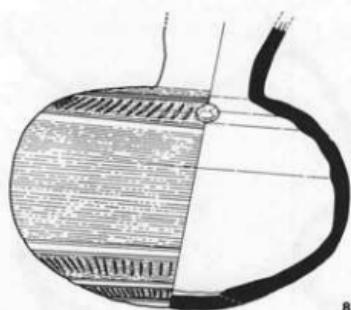
第8圖 法恩地南古墳石室內出土土器實測圖(II)(1:3)



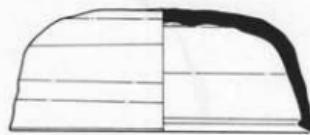
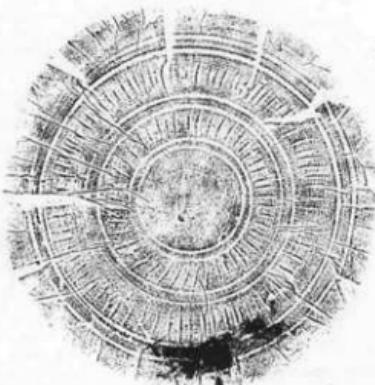
第10圖 法恩地南古墳石室內出土土器實測圖(Ⅲ)(1:3)



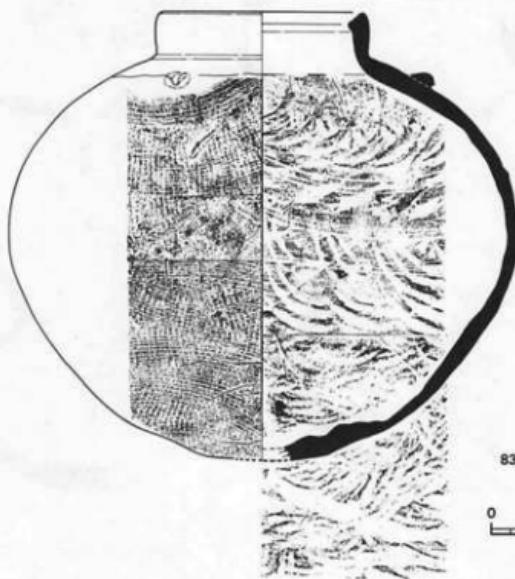
第11圖 法恩地南古墳石室內出土土器實測圖(Ⅳ)(1:3)



81



82



83

第12圖 法恩地南古墳石室內出土土器實測圖(Ⅳ)(1:3)

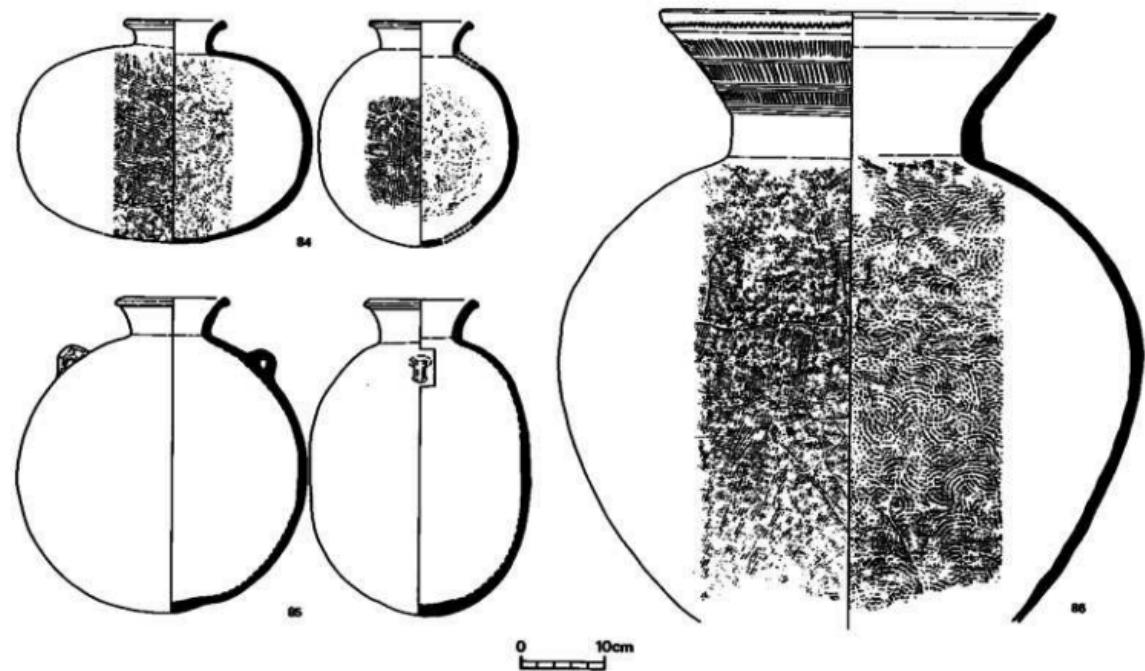
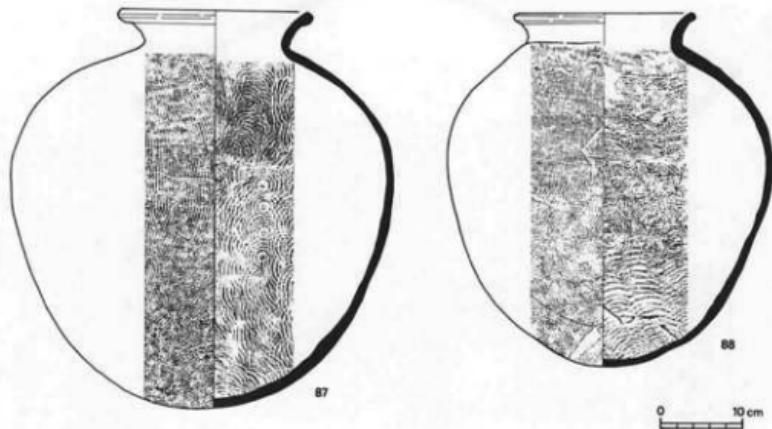


圖13四 法思地南古墳石室內出土土器實測圖(VI) (1:7)



第14図 法恩寺南古墳石室内出土土器実測図(Ⅷ)(1:4)

b. 鉄器 (第15図～第17図)

玄室内より直刀3、鉄鎌22、刀子4、鋏具2、轡1が出土した。

直刀 (第15図)

いずれも平造りの直刀である。1は完成品で、全長86.4cm、刀身長73.1cm、刀幅2.8cm、切先近くで2.4cm、背幅0.8cmを測る。茎の長さは12cm、幅1.3～1.7cm、厚さ3.2mmで、径0.3cmの目釘孔が2ヶ所にあけられている。関から茎へと続く部分に鍔と鈎が取りつけられている。また柄に付属すると考えられる2個の環状金具が遺存している。鍔は楕円形を呈し、径1.7cm×3.3cm、幅1.2cmで、厚さ2.5mmである。鈎は楕円形を呈し、径6.3cm×7.2cm、幅2.2～2.4cm、厚さ0.5cmで、6ヶ所に径0.7～1cmの孔があけられている。柄の金具はいずれも卵形を呈しており断面は方形である。鍔側の金具の大きさは2.9cm×4.8cm。柄頭側の金具の大きさは4.2cm×5.9cmを測る。2は切先をわずかに欠損するが、現存長64.3cm、刀身長54.6cm、刀幅2.4cm、背幅0.8cmを測る。茎の長さは9.5cm、幅1.6cm、端部でやや狭くなり1.2cm、厚さ0.4cmを測る。1と同様に関から茎の部分に鍔と鈎が取りつけられている。鍔は楕円形を呈しており、径2.4cm×3.2cm、幅1.8cm、厚さ2.3mm。鈎は卵形を呈し、径5.2cm×6.0cm、幅1.8～2.1cm、厚さ0.6cmである。3は茎を欠損している。現存長46.1cm、刀幅は身の中央付近で1.3cm、背幅0.4cmとなっている。刃部が波状になっており、研ぎへりした刀である可能性がある。関付近では刀幅2.2cmを測る。

### 鉄鎌 (第16図)

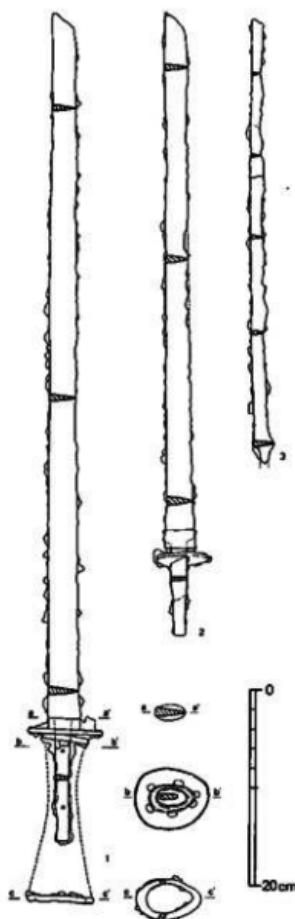
いずれも鋒化が著しいが本来の形状をよく保っている。大別して尖根式のもの4~21と広根式のもの22~25に分けられる。尖根式の内4~12は柳葉式で、刃闇が内湾するものである。8は完形品で、全長18.85cm、身の幅0.75cm、重さ11.75gである。莖被の断面は方形で、茎の断面は丸くなっている。9・10は近接して埋納されたためか鎌により接着している。11・12は刃部が他のものより大きく鋒が張っている。13~18はやはり柳葉式に属すると考えられるが、刃闇は直角になっている。18は完形で、全長12.4cm、身の幅1.0cm、重さ6.25gとなっている。莖被断面は方形で、茎断面は円形である。4~18の刃部についてみると、4~8、11、13~15、17、18は片丸造り。9・10・12・16は両丸造りとなっている。19~21は茎片であるが、植物繊維の巻きつけられた跡がいづれにも残っている。8・11・12にもその痕跡がみられる。また木質が残るものとして8・11がある。22は柳葉広鎌式のもので、刃部は中央でややくびれ両丸造りである。刃闇はほぼ直角である。全長13.85cm、身の幅3.0cm、重さ21.3g。茎の断面は方形で、木質が残っている。23は長三角形式で、刃闇は大きく内湾し、刃部は両丸造りである。莖部に植物繊維の跡が残る。24は腸抉柳葉式のもので、刃部には外反する逆棘がつき両丸造りである。莖部には植物繊維の跡が残るが他の鐵の基が鎌により接着している。25は矛箭式のもので、全長13.45cmを測る。刃部は平造りの扁平薄手で、莖被に向って直線的に挟まっている。莖部断面は方形で木質痕が残っている。

### のみ (第17図26)

刃部前半部と莖部端部を欠き、現存長6.3cmを測る。刃部幅1.5cmでやや内湾し、木質が残存する。莖部には鹿角が残存する。

### 刀子 (第17図27~29)

27は刃部前半部と莖部端部を欠き現存長7.2cm、刃幅1.5cm、背幅0.5cmを測る。闇は棟側は内湾し、刃側で直角気味に茎に続く。茎には木質がよく遺存している。28は完形で全長10.4cm、刃幅1.2cm、背幅0.3cmを

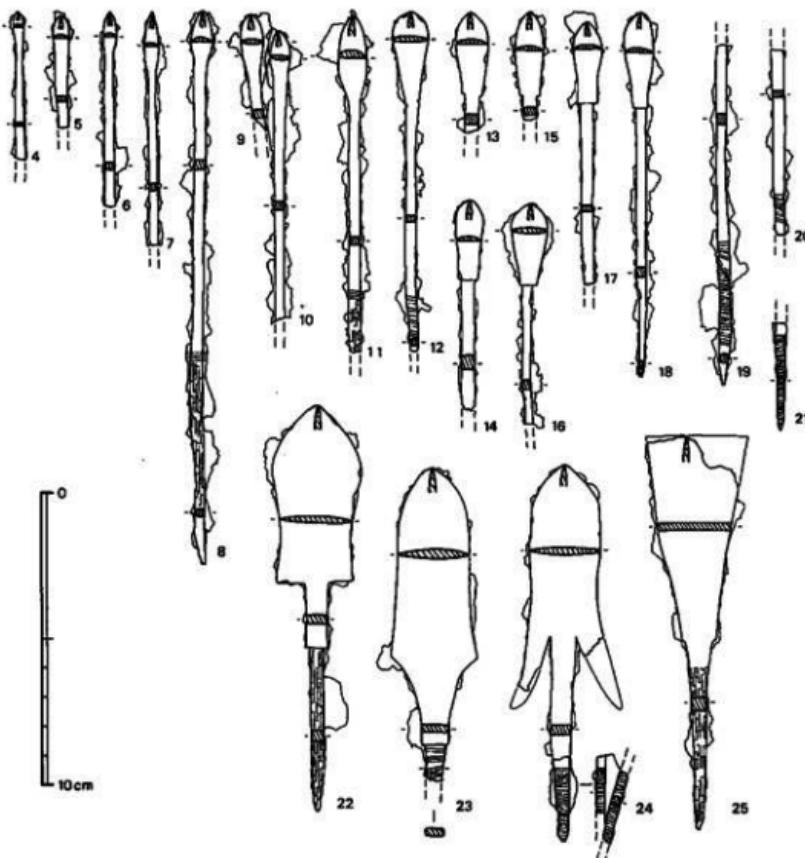


第15図 法恩寺南古墳石室内出土鉄器  
実測図(1)(1:6)

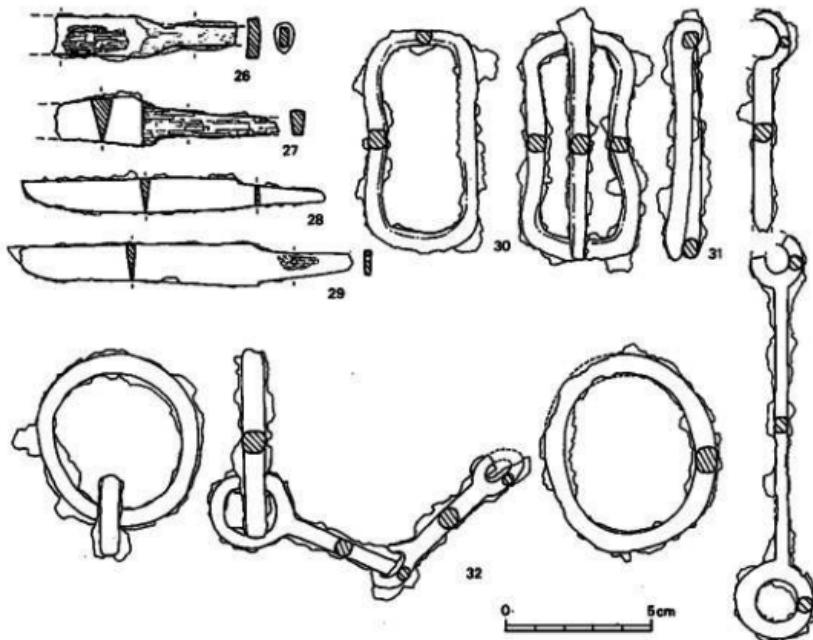
測る。片側である。29は刀部先端を欠き、現存長11.5cm、刃幅1.3cm、背幅0.3cmである。側は棟側で内湾し、刃側でわずかに直角に続いている。茎には目釘孔があけられ、その周囲に木質が遺存している。

#### 鉄具 (第17図30・31)

いずれも隅丸方形を呈す。30は刺金を欠くが全体の大きさは3.9cm×7.7cm、厚さ0.5~0.7cmである。31は大きさ4.0cm×7.9cm、厚さ0.5~0.7cmで、刺金は短辺の一端に巻かれ長さ8.3cm、厚さ0.7cmである。



第18図 法恩地南古墳石室内出土鉄器実測図(II)(1:2)



第17図 法思地南古墳石室出土鉄器実測図(III)(1:2)

#### 轡 (第17図32)

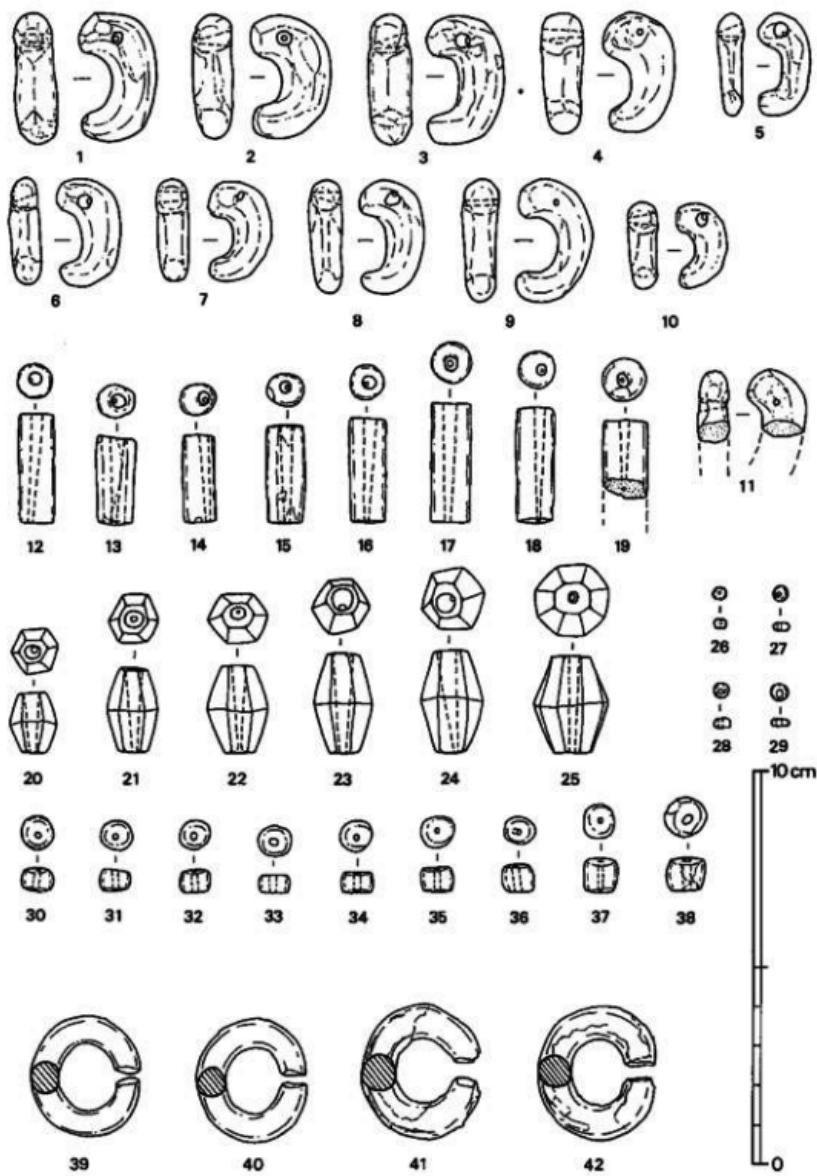
衡、鏡板、引手の一連のもので二連衡の轡である。衡は長さ7.6cmと現存長7.4cmで厚さは5.5~7cmである。断面は円形に近い。鏡板は素環のもので梢円形を呈し、断面は方形に近く大きさは5.9cm×6.7cmと5.4cm×5.7cmを測る。引手は現存長7.5cmと13.6cmで、鏡板に連結する環の一部を欠く。引き手壺に取りつく環は径2.6cmである。

#### c. 装飾品 (第18図)

瑪瑙製勾玉8、凝灰岩製勾玉1、水晶製勾玉2、碧玉製管玉8、水晶製切子玉6、ガラス製小玉13、耳環4が出土した。

#### 勾玉 (第18図1~11)

1~8は瑪瑙製で乳黄色の4・8以外はアメ色を呈す。いずれもよく研磨され、その形状はC字状あるいはコ字状である。重さは4.05~8.4gを量る。9は凝灰岩製で淡緑色を呈し軟質なものである。重さは4.1g。10・11は水晶製で11は下半を欠く。重さは10が2.6g、11が2.55g



第18圖 法恩地南古墳石室內出土玉類·耳環與珠(2:3)

である。1~11はいずれも一方向より穿孔がなされているが、9・11を除いて穿孔裏面側の孔周辺を凹ませている。

管玉 (第18図12~19)

いずれも碧玉製のもので淡緑色を呈し、よく研磨されている。孔はすべて片側穿孔で、長さ3.05~2.15cm、径0.8~1.15を測る。重さは2.7~6.3gである。

切子玉 (第18図20~25)

いずれも水晶製で片側穿孔である。上下面是八角形の25を除き六角形を呈している。重さは最小の20で2.5g、最大の25で11.75gである。

小玉 (第18図26~38)

すべてガラス製である。26は淡緑色、27はコバルトブルー、28・29は淡青色を呈す。30~38はナツメ玉と呼ばれるものでコバルトブルーを呈している。重さは小さな26~29で0.02~0.1g、大きな30~38で0.4~1.1gである。他に1点ナツメ玉の破片がある。

耳環 (第18図39~42)

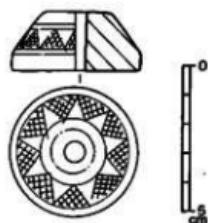
中実の鉛胎に金箔を張ったもの(39・40)と銀箔を張ったもの(41・42)がある。39は長径3.15cm、短径2.8cm、断面径7.5cmを測り、重さ20.7g。遺存状態は良好である。40は39よりやや遺存状態は悪いが、長径3.1cm、短径2.85cm、断面径0.75cmを測る。41・42は遺存状態は悪く約半分の銀箔が剥落している。41は長径3.35cm、短径3.0cm、断面径0.85cm、重さ26.0g、42は長径3.35cm、短径3.05cm、断面径0.8cm、重さ28.0gである。39と40、41と42はそれぞれ一对をなすものと考えられる。

d. その他の遺物 (第19図)

滑石製の紡錘車で、土取り断面の西壁玄門石付近より出土したものである。

上面径2.3cm、底面径4.9cm、高さ2.0cmを測り、黄褐色の光沢を有す。中心には径0.4cmの軸棒孔が穿たれている。底面より0.6cmまでは円筒状をなし、その上部は環体斜面をなす。環体斜面部には底面より0.75cm、1.40cm、1.60cmの所に圓線が廻り、第1線と第2線との間に頂点を上方に向けた格子目状の鋸歯文が廻る。また底面には、中心より0.8cm、1.20cm、2.0cm付近で3本の圓線が廻り、第2線と第3線の間を頂点を内側に向けた格子目状の鋸歯文が廻る。重さ59gを測る。

同種の紡錘車は三次市栗屋町若屋第9号古墳をはじめ、県内に4例の出土がある。



第19図 法恩寺南古墳石室内出土  
紡錘車実測図(1:2)

## (V) まとめ

法恩地南古墳は、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の古墳であり、前述のように様々な特徴を有し、多くの成果を得ることができた。しかし当地域の古墳の調査はほとんど行なわれていないため、近傍の古墳との関係やこの地域における歴史的位置づけなどについては今後の検討によらねばならない点も多々ある。これらのことについては今後の調査や成果に期するとして、この度の調査による本古墳の成果について若干を述べてまとめとしたい。

墳丘は盛土流失等により本来の形状・規模を明確にしがたいが、羨道入口より背面カットまで約10mを測り、墳丘西側の盛土の端は石室中軸線から約5.5mを測る。また羨道入口付近の墳丘の地山整形による等高線が円形を呈することから、墳丘南端は現在の羨道付近であったと推定された。これらのことから本古墳は直径10mないし11mの円墳と推定した。なお盛土には黒色土及び地山ブロックを含む黒色土が使われており、掘り方の排土や墳丘整形の際の排土を使用したものと思われる。

内部主体は、玄門を有する横穴式石室で、その構築法について若干が明らかとなった。第1基底石は両側壁とも長手積であるが、第2基底石以下では広口積である。また東壁では第3基底石の高さ及び第2基底石の形状に規制されたためか、やや雑な積み方をしており、西壁では第2基底石側面が床面に対し直角で比較的整った石材を使用している。石室の構築はまず西側奥壁石は掘り方の底面を掘込んで奥壁を入れ込むことによって固定し、これに西壁基底石が接することによって西奥壁を固定し、東側奥壁石はやや石室内側に入り込み、上部をやや前に出して西側奥壁石を支えている。次に東側第1基底石を奥壁石側面を支えるように当てている。これらの状況は石室掘方の規模及び奥壁石幅に規制されつつ、石室倒壊防止を考慮したためと思われる。なお東壁は、前述のように基底石を配置した後に第3基底石上面に合わせて側壁を構築し、さらに玄門石上面レベルまで積上げている。西壁は第2基底石しか残存していないため明らかではないが、東壁と同様な状況であったと推定される。このような石室構築法は周辺部の恩地古墳群中の古墳に數基認められるほか、向原町の戸島大塚古墳などに類例があり、可愛川流域に比較的流布する方と考えられる。

土器床の状況については概要の部分で詳細に述べたが、出土土器の型式的な特徴を加味して再考すると、東壁奥壁寄りで出土した杯類は1・2類が出土するが3類以下のものは認められない。これに対し、玄室中央棺台より玄門にかけての西壁寄り部分では2・3類が出土し、東壁寄りでは3類のみの出土が認められる。また4類は羨道部出土である。他の器種についても概ね同様な傾向を示す。このことから埋葬順位を考えた場合、まず玄室中央より奥壁側にかけての空間を使用したものと考えられる。この場合、杯類に2型式のものが混在しており、最低2回の埋葬が考えられるが、この部分の土器床形成は2類の時期に第1類のものを片付けるよ

うにして1類と2類を一括して敷いた可能性が強い。次に玄室中央棺台西壁寄り、さらに東壁寄りと順次埋葬が繰返された後、第4類期に埋葬を終了したものと思われる。また4類のものは玄室内に持込まれておらず、すべて羨道部より出土していることから、副葬品と考えるよりも墓前祭祀的性格の遺物として捉えられる。

つぎに須恵器類の出土状態についてみると、(1)大型變形土器及び中型變形土器は破砕して床面に敷き、杯類は伏せた状態で出土、(2)玄室外にかき出そうとしたもの、(3)石室前方の羨道にあたる場所に置いたとみられるものとがある。(1)は後述のように県内で数例あり、(2)は県内の横穴式石室では多々見受けられ、先に副葬した須恵器類が、本来の機能を失ったことにより原位置からかき出すことになったとみられる。(3)は墓前における祭祀的行事の後に石室内に副葬することなく置かれたのである。本古墳では長頸壺と杯類がある。

さて、本古墳出土の大型變形土器は底部の破片が一切出土していない。このことは石室内に搬入する以前に底部を打割った後、底部を除く破片を石室内に持込んだといえよう。この時期は杯類の出土状態からみて、玄室奥壁寄りの土器床の形成期である杯2類の時期であると推定される。なお甕の破片及び杯2類の石室中央部西壁寄りの出土からすると、その後、この部分の埋葬に伴い甕の破片と杯2類が若干移動したと考えられる。なお他の遺物も出土位置及びレベルに差異が認められ、本古墳では少なくとも4~5回の埋葬に伴い、遺物の整理、移動があったことは玄室からのかき出しの遺物があることからも推定に難くない。

須恵器を敷いて棺床とするものには、大型變形土器などを割って敷いている例と、杯類を伏せた状態で敷いている例がある。前者の例としては高田郡高宮町羽佐竹の後原第2号古墳では壺1個体分を割って棺床としており、同じく成安第2号古墳では甕、把手付鉢、四耳壺、提瓶のいずれも大型須恵器を割って床面を作っている。高田郡吉田町常友の青山第1号古墳では甕の破片を割って敷いているほか、杯類は伏せて敷いている。庄原市木戸町の中大平古墳は横瓶、甕の破片及び杯類を伏せて床面を作り、4回以上の追葬が行なわれていた。また世羅郡世羅西町の鶴首古墳では竪穴式石室の床面に大甕を破砕していた。甲田町上小原の谷上第1号古墳でも奥壁付近から杯類を伏せた状態で出土しているが、甕類の破片はいくつか存在するが故意に破砕したものであるか否かは不明である。つぎに甕類を割って敷かないで杯類のみを伏せた状態で出土した古墳としては、山県郡千代田町有田の有岡第1号古墳、三次市久々原第10号古墳、双三郡三良坂町植松第1号古墳などがある。このような出土例からすると甕類は埋置あるいは石室内への副葬の意義を失って破碎され、床面に敷かれているということになる。しかし杯類は破碎した甕類との同伴の場合も、甕類を入れない場合も伏せた状態にあるが破碎しておらず明らかに取扱いが異っている。これは破碎以前の甕類と杯類の用途や意図の違いであることに端をなすのであろうか、また地域性によるものであろうか今後の検討に期したい。

本古墳の時期は、出土の須恵器から陶邑編年のII~4期以降から杯身、杯蓋が逆転する時期までが考えられ、6世紀後半から6世紀末という時間間に収まるものである。この間に少

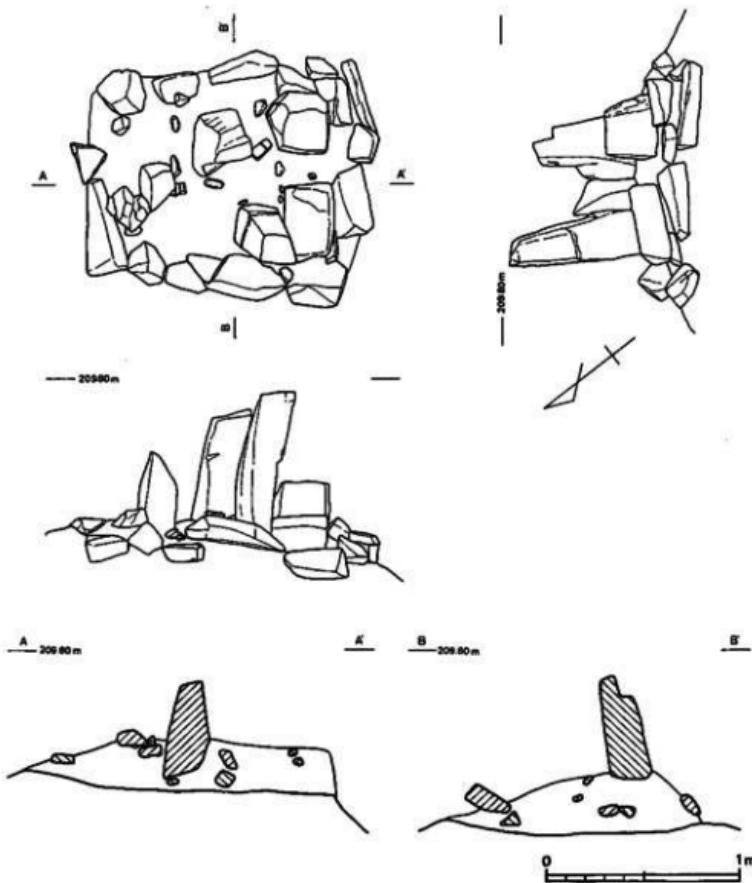
なくとも4～5回の埋葬が繰返されたものと推定され、この地域における家父長層の家族墓的性格を有するものであるといえよう。本古墳の周辺には多くの後期古墳の存在が知られているが調査の行なわれたものは少なく、類例の増加が待たれるが、この度の調査は以上のように多大な成果を得ることができた。

#### 註

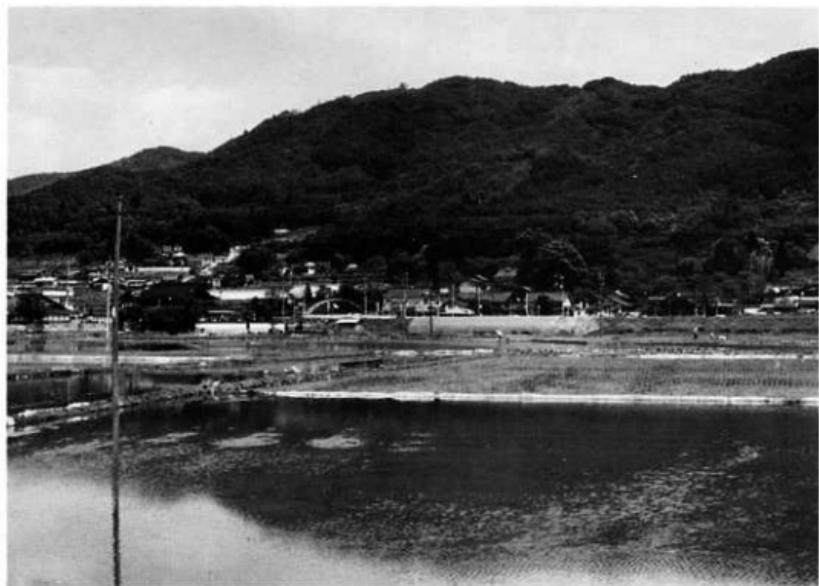
1. 言櫛友の会「広島県の主要古墳補遺」『芸備』第10集 昭和55(1980)年。
2. 潤見 浩「高宮町古墳群の緊急調査」『広島県文化財ニュース』第19号 昭和38(1963)年。  
・ 潤見 浩「広島県高田郡後原古墳群」『日本考古学年報15』昭和42(1967)年。
3. 潤見 浩「広島県高田郡成安古墳群」『日本考古学年報15』昭和42(1967)年。
4. 高田郡史編纂委員会「高田郡史」(上巻) 昭和47(1972)年及び小部 隆氏の御教示による。
5. 金井亜喜「中大平古墳」『日本考古学年報25』昭和48(1973)年。
6. 龍岩 古保利理藏文化財発掘調査団「龍岩・古保利、上春木埋蔵文化財発掘調査報告」73頁  
昭和51(1976)年。
7. 広島県教育委員会、甲田町教育委員会「谷上第1号古墳緊急調査概報」昭和58(1983)年。
8. 広島県教育委員会「城が谷造跡群発掘調査報告」昭和48(1973)年。
9. 広島県教育委員会「中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)」昭和54(1979)年。
10. 河瀬正利「植松1号古墳」『日本考古学年報24』昭和49(1974)年。

## 付・法恩地南第1号古墓

本古墓は法恩地南古墳南東墳丘上に位置し、現況では長辺1.5m、短辺1.3m、高さ25cmの方形基壇で、基壇上には自然石の墓標石を2本立てているほか、後世移築されたと思われる五輪塔の水輪及び宝蓋印塔の相輪、台座石が存在した。基壇盛土は若干の小円礫と古墳盛土の黒褐色土で構築されており、埋葬施設及び骨蔵器は検出されなかった。時期については遺物が出土しなかったため明確ではないが、形態等から近世江戸期頃のものと思われる。



第20図 法恩地南第1号古墓実測図(1:30)



a. 法恩地南古墳遠景（南西より）



b. 同上, 近景（北東より）



a. 玄室内遺物出土状態全景（南西より）



b. 同上, 中央寄り奥壁側（南西より）



a. 玄室内遺物出土状態奥壁寄り東壁側（南西より）



b. 同上。奥壁寄り西壁側（南西より）



a. 羨道内遺物出土状態（南西より）



b. 遺物取上げ後全景（南西より）



a. 奥壁状態（南西より）



b. 奥壁及び東壁状態（西より）



a. 奥壁及び西壁状態（東より）



b. 東壁玄門石状態（北より）



a. 東壁裏込め状態（東より）



b. 西壁裏込め状態（北より）



a. 石室基底石状態（南西より）



b. 完掘状態（南西より）

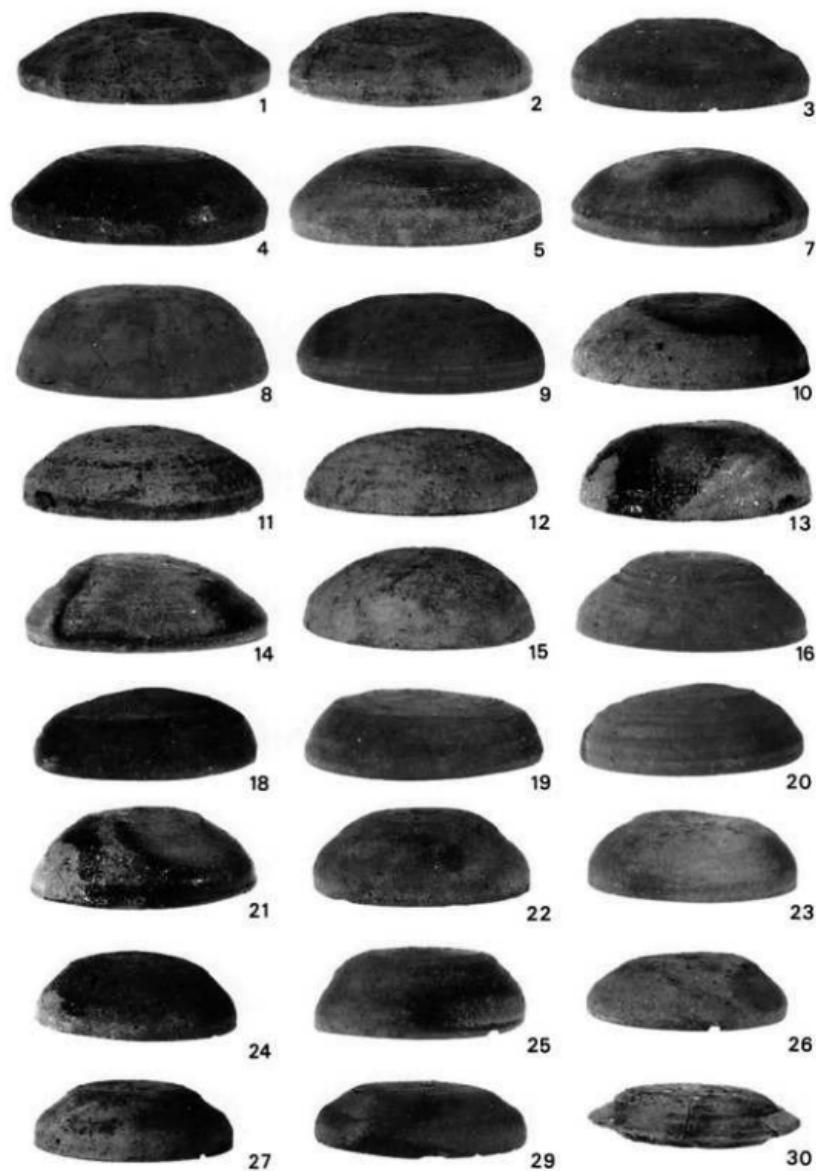


a. 法恩地南第1号古墓全景（南西より）



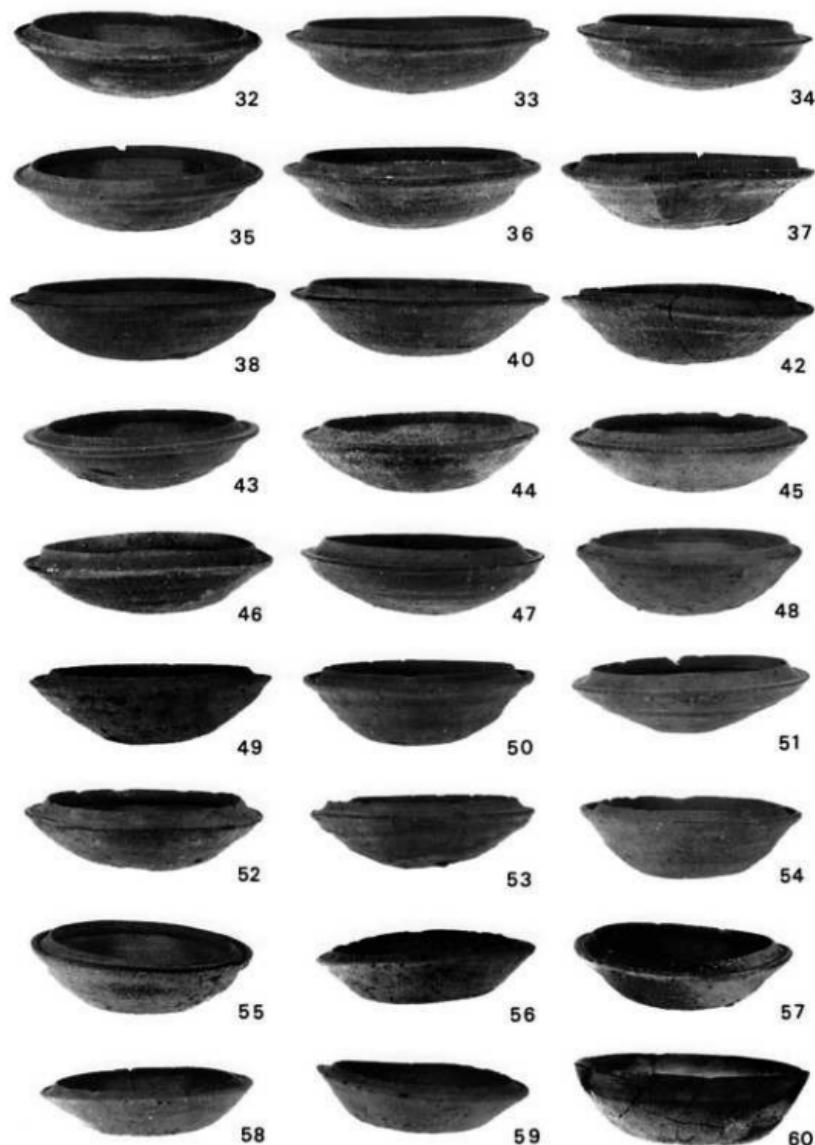
b. 同上。完掘全景（北東より）

図版 10



法恩地南古墳石室内出土土器 (1)

图版 11



法恩地南古墳石室内出土土器 (2)



法恩地南古墳石室出土土器 (3)



74



75



76



77



78



80



79



81



82



83



84

法恩地南古墳石室內出土土器 (5)



85



86

法恩地南古墳石室內出土土器 (6)



87



88

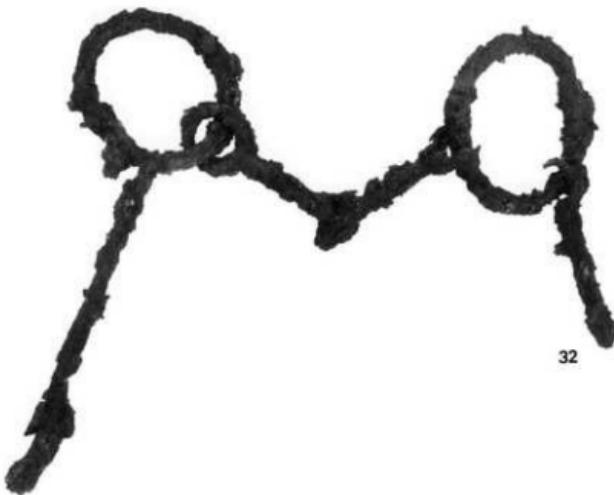
法恩地南古墳石室內出土土器 (7)



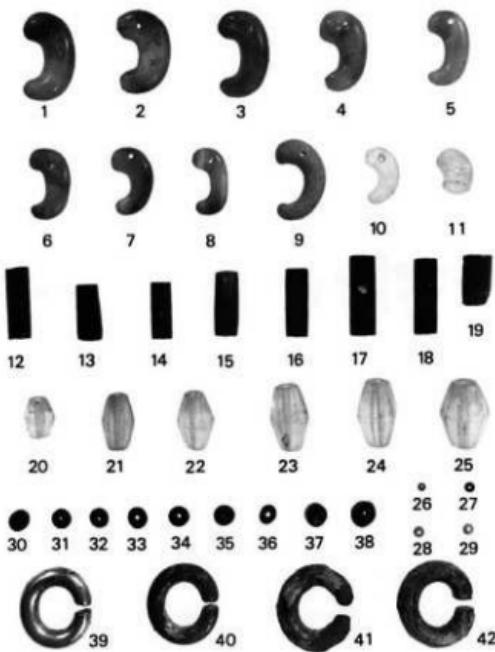
法恩地南古墳石室出土鐵器 (1)



法恩地南古墳石室內出土鐵器 (2)



32



法恩地南古墳石室內出土鐵器 (3), 出土玉類等

法恩地南古墳

1984・3

編集・発行

(財) 広島県埋蔵文化財調査センター

印 刷

電子印刷株式会社